

歩行空間の安全性と快適性に関する考察

金沢工業大学○大竹 杏介*・遠藤 孝夫**

*非会員 **正会員

1. はじめに

都市の市街地においては、歩行空間に限っても様々な利用者が存在する。歩行者、杖や車椅子を利用する人、乳母車を押す人などを始め、自転車利用者、あるいは横断歩道上や歩車非分離の道路上では自動車利用者も関係を有する。

利用目的という側面から捉えると、通勤・通学などの交通はもちろんのこと、会話をしたり、子どもの遊び場となることもある。

本研究では、歩行空間の安全性や快適性を考える際に必要な論点を整理し、現実の歩行空間に材を得て、より安全で快適な歩行空間をデザイン・計画していくための方法を検討する。

2. 研究方法

歩行空間を分析するための枠組みを整理する。

そのために、まず様々な側面から歩行空間を捉える。例えば、利用者という側面では、それぞれの特徴を明らかにする。調査項目の中には、利用する交通手段・道具なども含まれる。

こうした利用者側に関する調査によって、物理的に要請される構造の条件が状況ごとに整理される。これら利用者側の調査は、文献調査、関連施設における聞き取り調査、さらに物理的要件を検討するための計測などによって実施される。同時に、物理的要請のみからは判断できない利用者の意識調査も実施する。

一方で、一つ以上の住区を包含するほどの現実の地区を対象に、言わば歩行空間特性マップを作成するための方法も検討する。これは、前段の方法を踏まえた歩行空間の安全性や快適性の評価結果を地図の形式で表現したものとなる。

3. まとめ

利用者側に関する調査によって、歩行空間をデザインする際に着目すべき点が空間的・立体的に明らかになる。

一方の歩行空間特性マップによって、現実の歩行空間の評価結果が得られ、各評価項目における評価結果の分布を視覚的に捉えることが可能となる。

両者の結果から、歩行空間を線としてさらにはネットワークとして整備する計画を検討する際に拠って立つべき地図の作成方法が議論される。

これら地図形式の成果に関しては、カラーマップとして発表の際に提示する。